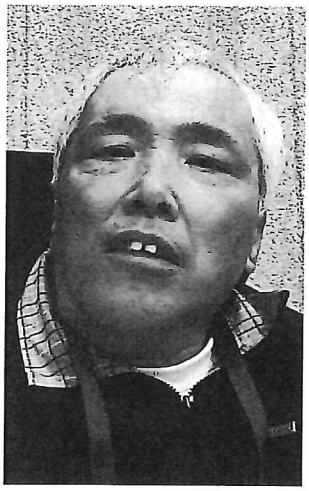
佳作 —第一部門—

愛と死の淵で

兵庫県
浜野伸二郎



わたしを、本当の母親以上に、愛を注いで育ててくれていた叔母が、わたしの十六歳の時、働き盛りの五十二歳の若さで、ガンに侵され帰らぬ人となりました。その上、わたしは整形外科の主治医から、「〝脳性小児麻痺〟の病だけでなく、背骨が湾曲して、やがて、心臓を圧迫し、〝死〟に至る〝麻痺性進行性側湾症〟の為、二十歳か二十五歳迄の命と覚悟しておけ」との告知を受け、高等学校を退学しました。そして、自分が必要と思ったもの、カウンセリング（心理学）や哲学・仏典・歴史（平和）・経済・校正・簿記・文学（詩作）などを通信教育を主に、かたっぱしから独学で学びました。

運命とは不思議なものです。失恋をして、〝恋なんてもうしない〟と思っていた矢先、一本の電話があったのです。大阪の施設で働いていました〝吉田多鶴子〟と名乗る人から「詩集のことで訪ねたい」との問い合わせの電話。耳に響く甲高い声だけの記憶しか残っていません。

彼女が訪れる日、どんな人だろうなと軽い気持ちで想像しながら待っていました。一九七三年六月の第三土曜日、丸いめがねに丸い顔、化粧気のない顔でした。後に束ねた長い髪が印象的でした。土曜日にもかかわらず、珍しく友人達は誰も来ていませんでした。昼過ぎから夕刻まで、ゆっくりといろいろな話をして弾みました。メインは某新聞に紹介された、わたしの第一詩集『人間―情念―』を仲間に売りさばいてやろうと、詩集を取りに来てくれたのでした。

彼女は短歌を書く文学好きの若者で、知的障害児の施設で働いていて、障害の種別は違えども仕事柄福祉に関心があったので意気投合しました。

わたしが、〝障害者〟と〝健常者〟が一緒になり、親睦をはかりながら福祉の向上を訴える『雑草の会』を組織し、活動していることを話すと、目の色を変えて興味深く聞き、「遠いから活動しにくいね」と言いました。「文通部も大切に考えている、やる気があれば出来る。大丈夫や」と勧めました。その場で会員に加わり、詩集二～三十部を風呂敷に包み持ち帰ってくれたのです。

彼女との話で分かったことがあります。一つは、実家が姫路市の西、赤穂郡上郡町だったこと。もう一つは、後から聞いた話ですが、わたしの顔色が青白く、どこか暗く、なんとなくほうっておけな

かったとのこと。それもそのはずで、吉田さんは、わたしより四つ年上でした。

なかなか休みのとれない彼女。うまい具合に第三回の『雑草の会』のキャンプに休みがとれたのでした。鳥取県東浜海岸のキャンプが運命を左右するとは、夢にも思いませんでした。

キャンプは人手が必要。吉田さんの参加は助かりました。主要メンバーは、わたしと同じテントにし、他の参加者は公平に、アミダくじにして班分けを決めました。偶然にも吉田さんと同じ班になったのです。キャンプの総勢は五十三名で、そのうち障害者は十余名（車いす使用者六名）でした。一日目もほぼ終わりに近づきました。過去二回のキャンプと異なることが生じたのです。それは、夜を迎えた開放感からか主要メンバーの多くが、アルコールを飲み酔いつぶれました。学校で席を共にした仲間が、お酒を飲む年齢になっていたことを忘れていたのです。わたしのテントは最もひどく、気をもみながら一人きりになりました。

その時、隣のテントの吉田さんが、わたしのテントをのぞき、「一人？入るよ」と言って入ってきました。そこで年上の吉田さんに、親代わりの叔母が他界し、突っ張って生きて来た苦闘を、堰（せき）を切ったようにまくし立てました。この頃、寂しく疲れていたこともあって、吉田さんが、わたしが求めていた相談相手、姉のように親しみが持てて輝いて見えたのです。しかし、まだその時には結婚相手の対象にはしていませんでした。

九月上旬、姫路工業大学生などと語らっている時のことです。母が手紙を持ってきてくれました。

十円不足の分厚い吉田多鶴子と記されたもの。「失礼な奴だなあ」と思い、封を切りました。だが、回りくどい長文で意味が理解出来ずに、隣にいた年上の笠原さんに読んでもらいました。すると慌てた口調で、「えらいことやで。これ、浜野さんに対するプロポーズやで……」と言われました。「ほんま?」と聞き返して手紙を奪い取り、じっくり読み返しました。わたしの頭はパニックになりました。嬉(うれ)しいというより戸惑い、どう答えるかと思案したのです。友人二人は、気遣って帰っていきました。半日の間、どうしたものか考え、夜、吉田さんに電話して言ったのです。「気持ち、うれしいよ。その前に頼みがあるのや。どうしても、今度の定期検診についてきて欲しいのや」と頼みました。それだけを言うのに口はからからになりました。

いよいよ定期検診当日。わたしは、自分の病気のことを主治医から聞いていたのです。「いよいよか」と思い、少し早めに起こしてもらって、プロポーズをしてくれていた彼女・吉田多鶴子さんを待ちました。

甲高い声で、「おはよう」。何ひとつかわりません。わたしは緊張していました。「そしたら行こう」と言って出発したのです。車いすを押してもらって明石駅まで行き、徒歩で、リハビリテーション中央病院へと向かいました。わたしは道中、ほとんど無言でした。彼女は盛んに語りかけてきましたが、ぶっきらぼうに返事を繰り返しました。

やっと病院に着きました。診察券を出し、レントゲンをとり、待合室で待ちました。呼ばれるまで

が、ものすごく長く感じました。看護師さんが「浜野さん」と呼んだのです。内心ドキドキでした。「はい」と即座に答え診察室へ。「おはようございます」と一礼して入りました。

中嶋ドクターは食い入るようにレントゲンを見ていました。看護師さんが付き添い用の椅子を出して「どうぞ」と言われました。吉田さんはたじろぎながら座ったのです。座るのを確かめて説明を始めました。レントゲンを指して、「浜野君。これ見てみろ、かなり危ないぞ。前にも言ったように、〝麻痺性進行性側湾症〟が進行しているぞ。今、約七十五度曲がっている。背骨の湾曲が、あと五度以上曲がったら心臓に負担がかかり、いよいよだぞ。安静にしていても進行するかも知れんから、それでも好き放題にするのなら止めへん。でも覚悟しとけよ。それから、半年に一度は診察に来いよ」。吉田さんは黙って聞いていました。

すぐに屋上に誘い、わたしは告げました。「聞いた通りや。僕は、〝脳性小児麻痺〟だけと違う。〝麻痺性進行性側湾症〟という病気もある。若くして、いつ死ぬかも分かれへん。それでもいいのやったら、ついて来てくれるか」。わたしは逆に聞き返しました。だが、別れるまで返事はもらえませんでした。

週に二度、こまめに来ていた便りもなくなってしまいました。わたしは、「やはり。また失恋か」と思っていたのです。ちょうど、一週間目のことです。吉田さんから、手紙が届きました。それほど期待はしていませんでしたが、やはり心ははやる。気持ちを押さえて封を開きました。便箋(せん)に一行だ

け綴られ書かれていました。「あなたについていきます」とはっきりと大きめの文字で。わたしは手紙を抱き泣きました。

その夜、早速電話しました。

「手紙もらったよ。ほんまにいいのか」と言うと、「くどくど言わんといて。書いているとおりや。わたし決めたんやから」。きっぱりした調子で決心の声は固かったのです。

手紙が届いて初めての仕事休み、二人でこれからのことを話し合いました。わたしは、「結婚したら独立しよう。大変やけど……」と言うと、「わたしもそのつもりよ。あんた浜野の家に居たらあかん。わたしも窮屈やし」。二人は合意したのです。親の説得が大変なことを承知していた二人は、まず、わたしの両親に独立を許させるために、彼女のことを理解させなくてはなりませんでした。

わたしは、「仕事が休みの日には必ず来て欲しい」と言って頼みました。実績をつくり両親の信頼を得られれば、説得できる自信を持っていたのです。「おまえの両親どうする?」と聞くと、「たぶん賛成してくれへんと思う。その時は、親と縁を切って家出する覚悟や」と言い放つ彼女に、「先ず、説得するのや」となだめました。

彼女は、毎週休日に来るようになり、『雑草の会』の活動と、風呂に入れるなど身の回りのこともして帰るようになっていきました。少しずつ家族は、彼女の存在を大きくとらえるようになりました。わたしは、体当たりの精神で、母に「吉田さんを覚えている? 〝結婚〟しよう言っているのや。ええ

やろ?」と、翌年の春に切り出したのです。胸は、はちきれそうでした。「いい人やから、お母ちゃんは、有難い話けどな。相手に親御さんいてるのやろう。あんた言い出したら聞けへんけど、先方さんのこともよう考えなよ」。母は目をうるませていました。わたしは、「しめた!」と、その夜、彼女に早速電話で報告をしたのです。「分かったわ。今度は、わたしの番ね。がんばってみる」と決意の声が返ってきました。

わたしの家族は、〝結婚〟については、承諾したものの、どこでどのように暮らすかは決めていませんでした。両親は構想を持っていました。伸二郎の面倒は、兄達を同じ敷地内に住まわせて、一生世話をさせるというものでした。わたしが結婚するとは夢にも思っていなかったからです。そうして、とうとう独立を獲得したのです。

ほとんどデートらしいデートの思い出はありません。彼女の休日には、会員の家を訪問したり、福祉活動に関わっている人達に会ったりして、二人だけで居るということはなく、『雑草の会』の会員などが訪ねて来たりし、行動を共にしていました。

知り合って二年目の夏。何かの悩みごとが起き、いつものように電話をしました。らちがあきません。「梅田までおいでよ」。「電車に乗せてもらったら駅まで迎えにいくから。わたしの保母室で泊まったらいいわ。わたしの休みの日に送って行くやないの。二〜三日ぐらい寮にいても大丈夫やろう。ぐずぐず言うていたてしょうがないやない」。考える暇もなかったのです。たまたま話に来ていた会

員に電車に乗せてもらいました。大阪まで約一時間余。仕事が夕刻までなので、夜になってから着かないといけない。到着時刻は連絡済み。じっと乗っていればいいというものの、初めての単独乗車は、「もし、車いすごと倒れたら……」。よけいな心配が次々わいてくるのでした。

彼女の部屋に着きました。初めて二人きりで夜を明かす。少々緊張していました。とにかく語り始めたのです。そして、どちらからともなく、ファーストキスをしたのです。結婚迄の二年間、この場所が、わたしのオアシスになりました。福祉をはじめ文学・平和の活動をしながら結婚の準備を始めたのです。

彼女の両親は、猛反対でした。わたしは、必死に説得を重ねる波状攻勢をかけました。叔父さんなどに話をして説得に行ってもらったのです。わたし自身も、彼女のご両親に会い、決死の思いで説得しました。会って話をしている時は分かったようなことを言われますが、彼女が直接、後から尋ねると首を縦に振ることはなかったのでした。

彼女の家は、二人姉弟の長女でした。〝重度障害者〟と〝健常者〟の結婚は、今でも難しい。ましてや、三十余年も前のこと。しかし、彼女が言い切りました。「最初から分かってくれるようなら、本当の親かな、とわたしが逆に疑うわ」と苦笑していました。

〝死〟の宣告をされていましたので、一日でも早く結婚したかったのです。その初冬、彼女から珍しく電話がありました。何事だろうと思いつつ、受話器に耳をあて、「もしもし、どうしたん」とぶ

っきらぼうに言いました。彼女の声は上ずり、「両親が、両親が……。式にだけ出席する言うてくれたんよ」。わたしは、自分の耳を疑い、「なに、ほんまか」と聞き返すと、「ほんま、ほんまよ」と、はっきり聞こえました。わたしは、『やった！』と心で叫びました。

いよいよ結婚式の準備だ。わたし達二人はどのような形式でするのかの構想を描いていました。結婚式は教会で行い、会員制ですることにしていました。何故かというなら、友達や知人も家族と一緒に式場に入室できて、晴れ姿を見てもらえるからです。春休みの日曜の大安は四月四日しかなかったのです。

「数字が悪いなぁ」。と言う実行委員会のメンバーもいましたが、その日しかないということで決まったのです。

彼女と市役所の福祉課窓口に何度も足を運んで、担当者に事情を説明して、「なんとかして欲しい」と頼み込みました。「ちょっと待って…」と言って、住宅課と相談してくれました。「結婚したら収入なくなるな。そしたら、市営住宅でええな。今なら〝書写〟か〝飾東町〟しか空いてないけどいいか……。便利が悪くなるけど」と言われたので、交通の便を比較して、飾東町夕陽ヶ丘の住宅に決めたのです。引き出物は、二人らしいものがいいとのメンバーの提言で、わたしの詩集と彼女の短歌を、一冊の『絆』という題の詩歌集にしてタイプ印刷したものにしたのでした。全て二人で決めて事後承諾させました。エンゲージリングも二人で買い求め、わたしの衣装は、友人のお母さんの助言で、貸

衣装を借りてきました。

仲間の協力で、結婚式当日を迎えました。天候も晴天に恵まれ、教会前の桜の花も微笑(ほほえ)み、百名を超す人がかけつけてくださいました。新婚旅行は、広島の原爆ドーム（平和資料館）を見学したかったので、二泊三日と体に無理のない程度の範囲内で、①高松→②松山→③広島のコースを予約していました。

その夜に、無事高松の旅館に着きました。先ず食事をとりました。解き放された気分でした。ヤレヤレというより、闘いに勝ったような妙な気持ちでした。お風呂は、車いすでは狭く利用出来ませんでした。わたしは、体を丹念に拭いてもらいました。多鶴子は、胸から腰の下辺りまでを、バスタオルを巻いて出てきました。わたしはギクッとなりました。二人は裸で抱き合い、多鶴子の補助で全ての行為が果たせたのでした。わたしは、〝イチニンマエ〟になれたと思いました。

この旅では、各地を丁寧に見て、我が町の福祉が遅れていることと、住民の障害者に対する接し方の低さに気がつきました。〝姫路で、もっと力を入れて福祉を訴えて行こう〟と決意を新たにさせられました。最も感動したのは、広島の平和公園にある、平和資料館でした。息が詰まる思いと同時に、〝原爆〟の恐ろしさを知り、戦争の愚かさを痛感しました。十八歳の時に読んで、詩を書くことと平和運動に携わるきっかけとなった、峠三吉の『原爆詩集』の詩を思い起こしました。ここでは、戦争反対の平和運動を、福祉の向上のためにも続けていくことを自分の心に言い聞かせました。

心が安らぎ、満ち足りた日は、そう長く浸っていられませんでした。

力まかせに、わたしを抱いて介護していた妻が、ある日〝ぎっくり腰〟を起こしたのでした。湯船から、わたしを抱き上げた瞬間に、「痛い！」と叫んだ妻は、何とかベッドまで運んだが、ベッドに横たわっても、痛みが増してきて、額に脂汗を浮かべて、珍しく弱音を言ったのです。「あなたを抱けなくなったら、〝結婚生活〟もう終わりネ……」と涙を流す妻に、わたしは「絶対に治るよ」と言って、肩の下まである妻の黒髪をなでました。そうする以外、わたしは、なすすべがありませんでした。治療を受けながら、抱くコツを教わりました。〝新婚生活〟というより〝結婚生活〟最大のピンチを乗り越えた後、軽い腰痛は起こしても、寝込むような〝ぎっくり腰〟は、幸い起こしていません。日頃から注意をして予防しているからです。

市営住宅のある夕陽ヶ丘は、バスの始発・終着点だったので、バスで街に出かけていましたが、一時間に一本と便が悪くて、三段の高いステップは、乗り降りがキツイ上に、最終が八時台。同人誌の『姫路文学人会議』の合評会が終わると、最終のバスは間に合わず、同人誌仲間に送ってもらっていました。その他の活動を続けるにも、便利が悪かったので、妻が、教習所に通って自動車免許証を取得することにしました。

機械に弱い妻は、自動車免許は持っていませんでした。わたしの足を確保する為の必需品〝自動車の免許〟を執念で獲得したのです。

〝大腸のかいよう手術〟や〝頚椎症の患い〟など、肺活量四〇〇㎖、抵抗力の乏しいわたしは、医者通いが日課でした。病になると、すぐに弱音を吐く。そんな時に、妻の手が飛ぶこともありました。山また山の二人二脚の道程でした。

未熟児として生まれて、過去四度医師から『死』の宣告を受け、特に、「二十歳か三十までの命」と言われていた為に、三十歳頃まで、定期検査の前夜は、子どものように妻に甘えて、「恐い！」と涙を流し抱きついて眠ったこともあります。もちろん妻も死におびえていたのでした。

わたし達夫婦は、格別に〝結婚記念日〟を大切な日と位置付けていました。「一年もった」次の年になると、「また、一年もった」という具合に。こうした喜びは表現しがたいのですが、普通の夫婦には味わえないことと思います。

四十歳の頃から、〝結婚記念日〟がくると言うことが変わってきました。「あんた契約不履行やわ。わたしの〝夢〟破ったやない。また一年長生きして」。「何が契約不履行やねん」。「知的障害児の施設を二～三年ずつ勤め、全国の施設を回るつもりでいたのに、〝短命〟ということで結婚したら、十年も十五年も死ねへんねんから」。「俺もこんなに長生き出来るなんて思ってなかったし、先に『プロポーズ』したのおまえやから、『契約不履行』は言いがかりや。俺が死んだら何処に行って働いてもええ」。「もう遅いわ。こんな歳とってしもたら、どこも雇ってくれへんわ。しょうがない。生きたいだけ生きたらいいわ。最後まで面倒みたるわ」と言って微笑む妻。

叔母が急死してからわたしは性格が変わりました。がむしゃらと言うほど積極的になりました。実の親元に帰っても、ほったらかしな状態。親身になり守ってくれる人はいません。自分のことは自分で守って、己れの道は自ら切り開いたのです。そこで妻は太陽でした。しかし結婚生活では、現実は厳しいものでした。貧しさと病との格闘です。妻は、ときには看護師として、ある時は母として、二十九年もの間、一日たりとて休息もなしに介護をしてくれています。

現在、わたしが活動を続けて出来るのは、数多い人達の力添えの賜物と感謝し、福祉・文学・平和を極めていきたい。妻の支えの下で、日々闘っています。

浜野　伸二郎

昭和二十七年生まれ　無職　兵庫県姫路市在住

【受賞のことば】

この度、私の書いた〝愛と死の淵で〟が、「第四十回ＮＨＫ障害福祉賞」に佳作入選したことは、思いもしていなかったので、嬉しい限りです。

この作品は、重度障害者の私が、死の告知を受けながらも、健常者を妻とし、その過程と結婚生活を赤裸々に綴りました。道程は苦闘の連続でしたが、この作品を読まれた障害者に勇気と希望を与え、地域社会の方々に障害者に対する理解をと願望したものです。

選評

医師から二十歳かせいぜい二十五歳までの命と宣告された作者が、通信教育で学び、詩集を出版し、それが縁で年上の女性と恋をし、両方の両親を説得して結婚。以後、常に間近に迫った死を覚悟して一年一年を大切に、貧乏と病と闘いながら、いつしか五十歳を過ぎるまでの、「太陽」のような妻と二人三脚の二十九年間の歩みが、みずみずしく感性豊かに描かれています。

（山口　薫）